

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 70

2014年5月

Special to the Newsletter

アメリカの大学進学競争から

篠原 初枝

2014年3月下旬の『ワシントン・ポスト』紙（筆者は *Japan News* 3月26日付の転載版を読んだ）に興味深い記事が出ていた。記事のタイトルは“Rejecting Admissions Madness”というもので、意識するならば「大学進学競争に物申す」といったものになるであろうか。この記事を書いた著者は、オランダ人作家で、2012年にアメリカに移り住み、現在はニュージャージー州のプリンストンに居住している。

この記事は、まず著者の15歳になる息子宛に、さまざまな大学からダイレクトメールが来たことから始まっている。全部で40にもなろうとするこのダイレクトメールの内容は、「おめでとございます」「早い決断があなたのご息の未来を決めます」といった内容が述べられているという。このようなダイレクトメールがこぞって来始めたことや、著者の友人の娘が大学願書提出締め切りに間に合わなかったことで、その両親が「これまでの努力がすべて水の泡に終わった」と嘆いていたことから、著者はアメリカのアドミッション（大学入試）プロセスに思いをめぐらせている。日本の大学入試とは異なり、アメリカでは各大学試験場での筆記や面接ではなく、全国一律の学力試験を行った上で、一定期間に願書を送り、それを大学側が判定し入学者を決めるというシステムになっている。

自らがオランダ出身であることから、著者はアメリカとオランダの教育システムを比べている。この記事によれば、オランダでは12歳の小学校卒業と同時に全国レベルでの一斉入試が行われ、そこで上位約20パーセントが大学教育につながる進路に進むが、残りは実務教育を重視する進路に振り分けられる。この記事の著者は、オランダ的システムの短所も認めており、それは早い段階で子供の進路を決めてしまうことだという。他方で、上位20パーセントの高等教育系進路に入れば、大学入試にそれほどの競争はなく、だいたい望んだ大学に行けるという。

アメリカでは、大学入試まではそれほどの競争はないため、大学入試に際して一斉の競争となるわけである。東部のアイビーリーグといわれる名門私立大学では、競争率もきわめて高く、2014年の結果によれば、入学比率は、ハーヴァード大学5.9パーセント、イエール大学6.3パーセント、

コロンビア大学 6.94 パーセントなどである。志願者数でいえば、そのうち、イエールへの志願者は 30,932 名、コロンビア大学への志願者は 32,967 名であった。

一流大学への入試が狭き門であれば、それにかかわるビジネスが生まれるのはどの国でも同じである。入学試験で決まる日本であるなら、予備校、家庭教師が存在するが、入試が存在せず、どの大学・学部を選び、どのように願書を書くかということが重要になるアメリカには、「大学進学カウンセラー (college counselor)」という職種が必要となる。各高校に職員としてそのカウンセラーが常勤している場合も多いが、それ以外にも民間で個別に相談を請け負うカウンセラーも存在する。上記のオランダ人作家は、同じ年頃の子弟をもつ友人に「お金はかかるけれど、絶対に相談すべき」と勧められて、自らも自分の息子を連れて、民間カウンセラーの門をたたいたという。カウンセラーは、まず何に興味があるかという質問をしたが、自分の息子の興味は天文学から、カードゲームの勝利方法のことまで、雑多であったがゆえに、最後にそのカウンセラーは「あなたの御息はまず自分の関心を絞ることが重要です」と言われたと書いている。著者は好奇心の強い 15 歳の男の子に、雑多な問題に関心を持つよりも、何かひとつに集中しなさいとは言えないのでは、と自問している。

民間カウンセラーへの相談が有料であるように、自分の子供に一流大学での教育を受けさせようと思うならば、多大な費用がかかることも事実である。ハーヴァード大学では奨学金制度があるので、60 パーセントの入学生が何らかの奨学金を得ており、全学生の平均納付金は 12,000 ドルであり、年収が 65,000 ドル以下の家庭からは、何も徴収しないという。他方で、奨学金を受けない学生、すなわち 40 パーセントの私費学生が、学費と寮費として大学に納める年額は、58,607 ドルである。この金額には、本代や小遣いは入らないので、大学 4 年間私費でハーヴァードへ通うと膨大な金額がかかることになる。むろん、家庭また学生自身が student loan を組むことも多いので、私費学生のすべてが当座にそれだけの費用を有しているとは限らない。

このようなストレスのかかるアドミッションプロセス、また多大な学費がかかることから、果たして、アメリカの大学教育がそれに見合うものなのであろうかという声があがってくることも理解できる。上記のオランダ人著者も、結局はマイクロソフト社を起業したビル・ゲイツもハーヴァード大学の中退者であったのではないかと指摘している。

良質の環境で良質の教育を受ける機会が望ましいことに、誰も異論はないであろう。筆者は、ハーヴァード大学やイエール大学ではその図書館しか利用したことはないが、その蔵書はむろん優れており、キャンパスも知的な雰囲気に満ちていた。

また、ハーヴァード大学やイエール大学ではないが、筆者のゼミ学生の一人（日本人）が、東部名門女子大ウェルズリー (Wellesley) 大学出身であったので、2009 年ボストン郊外のウェルズリーを訪問し、学生のディスカッションをベースにした交流計画を行った。ウェルズリー大学は、ヒラリー・クリントンの母校でもあり、女性指導者を多く輩出している大学でもある。いかにも優秀な両家の子女といった学生がそろっていたし、そのカフェテリアでのメニューや食器さえも、アメリカ社会における「クラス(階級)」を示しているのではと、当時感じたものだった。アメリカには、ハーヴァードやイエールのような総合大学ではなく、アマースト大学、ハヴァフォード大学等、いわゆるリベラル・アーツ (教養教育) に特化した名門校も多い。これらの学校は少数精鋭教育をモットーとし、その卒業生は卒業後、大学院へ進学する者も多く、緊密なネットワークを築いていく。上記

の2009年のゼミ研修旅行で、ウェルズリー卒業者の友人が、ニューヨークのアメリカ国連代表部でインターンを実施していたことから、我々ゼミも同代表部を訪問し担当外交官と面談できた経緯があり、エリート校ネットワークの実力を痛感させられた。けだし、その日本人ウェルズリー卒業者は、高校からアメリカ東部の Boarding School といわれる全寮制学校からのウェルズリー進学者であったから、出身家庭の経済的資質は当然のことながらあった。

このようなエリート教育の状況を見ているならば、アメリカのように、機会均等を少なくとも表だって掲げる社会において、教育を受ける機会が均等かどうか、議論の余地があるであろう。オバマ大統領のように、ずば抜けた知的・人間的資質を有していれば、奨学金を得て、最高の学問を受ける機会はある。しかしながら、中間層といわれる人々では、家庭の経済的資力が子供の教育機会に影響を及ぼしていることも事実であろう。また、社会的に下層の場合、高校の中退率が高いともいわれており、家庭の経済状況と、教育を受ける機会が連動している。

他方で、アメリカは広い国であり、上述したようなオランダ人著者が嘆いた状況は、地理的には東部や大都市のエリート層に顕著ともいえるかもしれない。著者自身も書いてはいるが、著者の居住地がプリンストンであるからこそ、その在住者の経済的・知的レベルも高く、このような競争が過熱気味ともいえる。大学進学への競争やその意識がそれほど高くはない地方も存在するように思う。私事であるが、筆者の夫はアメリカのネヴァダ州、州都カーソンシティの出身であった。夫は、既に物故したが、筆者は一年に一度義母や夫の兄弟を訪問するので、東部エリート進学熱とは別の世界も存在すると感じた。

義兄には3人の娘がいるが、その内、次女と三女が大学へ進学したが、何のためらいもなく、ネヴァダ州立大学リノ校を選び進学した。州立であるため州居住者への学費はきわめて低額である。教育の質内容を問うことはできないが、次女は卒業後、州政府で福祉関係の仕事に就いている。三女は、スーパーマーケットチェーンで働いているが、これは東部の学費が高額とされる学校を出てもあり得ることである。ネヴァダ州のカーソンシティには、高校は一つしかなく、むろん隣の州であるカリフォルニア州へ行って、University of California のバークレー校や UCLA への進学する学生もいないわけではない。しかしながら、上述のオランダ人著者が嘆いたような進学熱があるとはいえないように筆者は感じた。地元の州立大学を出ても、自分が望む仕事に就くことは可能であるし、よけいな競争に巻き込まれて、不必要なストレスにさらされることもない。

著者は、留学生の多い大学院で教えており、アメリカ人留学生のなかには、教育は自己への多大な投資であり、それによって自己の将来を開いていくという固い決意をもって勉強やインターンに励む学生もいる。同じような傾向は、中国人留学生にもあてはまるかもしれない。中国でも大学への進学競争は激しいと聞いた。どこかのんびりとした日本人学生には、彼らの存在は刺激であり、グローバル化し激しい競争にさらされる世界のなかで、教育も競争から無縁ではありえないであろう。しかしながら、競争のための競争は無駄なエネルギーの消費に終わるし、大学(大学院)教育とは、自己の世界を広げ自己を鍛錬する機会であるということも忘れてはならないであろう。そのような貴重な時間が、経済的基盤も絡む進学競争を経た勝者にだけ与えられるものだとしたら、それはどこか虚しいとも思うのだが、それもまた現実かもしれない。

(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授)

文学の中のアメリカ生活誌 (61)

新井 正一郎

Pennsylvania (ペンシルヴェニア州) ウイリアム・ペン (1644 ~ 1718) の父はジャマイカを征服したイギリスの海軍提督で、資産家であった。かかる生家で両親の溺愛を受けて育てられた少年期のペンは、感受性が鋭く、現世的なものに関心を向けることができない性格だった。後に彼が父の不興をかい、アイルランドの田舎で暮らすはめになった直接の原因は、オックスフォード大学在学中に、国教会に従わないような行動をして退校処分になったことにある。イギリスからの追放という父からの厳しい罰のなかには、ペンの宗教へのかかわりをやめさせようとする父提督の強い願いが入っていたことはいうまでもない。しかし父の期待どおりにはならなかった。アイルランドでも信仰への熱意を変わず持ちつづけ、こともあろうに非国教派の一派であるフレンド派 (クエーカー教徒の呼び名) の信仰に染まったからだ。そのプロテスタントは信徒に救いをもたらすのは「良心の光」であって、教会組織の支配者や聖書ではないと説くものであった。そのため、青年時代のペンは4回も投獄された。

しかし父の死という不幸が彼の生涯に転機をもたらした。時のイギリス国王チャールズ2世が父に多額の借りがあることを知ると、彼は未払い金の代わりに1644年から国王が所有していたニューヨーク植民地 (元はニュースウェーデンと称されたデラウェア地点のスウェーデン人、オランダ人の混合植民地) の一部の譲渡を求めた。1681年、国王はこの地を彼に下付した。かくして彼はデラウェア川沿いの広大な土地を自分の領地として経営する領主になった。この森の多い領主植民地は彼が父を記念してつけた名から Pennsylvania (「ペンの森」、sylvania は「森林地」を意味するラテン語) と呼ばれるようになる。これを機に彼はデラウェア川上流の森林地帯に「聖なる実験」と呼んだ古代都市フィラデルフィア (ギリシャ語 Philadelphia 「兄弟愛」) のような町をつくることを決意する。

1682年10月、イギリスで募集した200人の入植者を伴い新しい場所に移り住むと、付近の広い土地をインディアンから友好的に買い上げ、測量士トーマス・ホームズを雇い、クエーカー教義に基づく「健全で平和な緑の田園の町」造り (聖なる実験) を指揮した。当初の植民者は迫害されたクエーカー教徒だけだったが、ほどなく信教の自由というこの植民地の宗教上の寛容策に引き寄せられ、イギリス国教徒、メノー派、カルヴァン派といった多くの宗派の人々が移住してきた。この地所は「パンの植民地」と呼ばれたように、畜産だけでなく、農業にも理想的な環境だったので、ペンは勤勉な労働者を集める理由から、ヨーロッパ各地の植民者向けに自由な暮らしと富を約束するパンフレットをつくり、配布した。その結果、宗教だけでなく国籍も多様化し、北アイルランドのスコットランド農民、パラダイン地方のドイツ農民、北欧またはフランスからの年季奉公人などが大西洋の荒波を越えて次々と渡ってき、フィラデルフィアは急速に国際色を帯びていった。短い期間にこの地は船舶が出入りするたびに移民をおろし、ヨーロッパへのペンシルヴェニア産の多彩な商品を積み込むのに忙しい海港都市として経済発展していった。この激動のなかで初期のクエーカーが強調した信仰と質素な生活は色あせ、ペンが亡くなった1718年には現世のものへの執着と階級差別の増大を特徴とする人口1万の都市に変わったが、18世紀の外来者の目に映じたフィラデルフィアの異なった民族と宗派の人々は、活発に交流しあい民主的風潮の強い、開放的で、洗練された社会をつくっていた。

新興の都市フィラデルフィアの物質的、現世的な楽しみに引きつけられた一人が、1723年、兄ジェームズの印刷所で見習工として働いていたボストンから、ポケットにわずか1ドルを入れただけでやってきたみずぼらしい身なりのベンジャミン・フランクリン（1706～1790）である。その後の長い生涯の間、彼の第2の故郷となるフィラデルフィアに初めて足を踏み入れた時の様子については、彼の文学的傑作『フランクリン自叙伝』（1791年に執筆開始、4部全体が出たのは1868年）の初めの部分によって知ることができる。次はその一節。「それから私はあたりを見回しながら通りを歩いていくと、市場の建物近くでパンを持った少年に出会った。（略）どこで手に入れたかを尋ね、教えてもらった2丁目のパン屋へすぐに行き、（略）小型食パンがほしいといったが、フィラデルフィアでは作っていないようだ。（略）（別のパン屋で買った3ペンスの大きなパンを）ポケットに入れるところがなかったので、両脇にひとつずつかかえ、残りのひとつのロールパンを食べながら歩いた。そして市場通りを4丁目まで歩き、後に私の義理の父になるリード氏の戸口のそばを通ると、未来の妻がそこに立っていて、私を見、恐ろしくぶざまでおかしな様子をしていると思った」。フィラデルフィアで自分の道を歩きはじめた彼は「恐ろしくぶざまでおかしな様子」からこの町で最も尊敬される市民数学者、科学者、発明家、外交官、作家、政治家となったことは周知である。

この『回想録』—自分ではこう称している—の著者は、自分の生き方を実験材料として、アメリカには自助（勤勉と精進）を持つ人ならば、社会的、経済的背景が無くとも成功者になれる自由（神話）が存在していることを、身を持って証明したのだ。この作品の底にひそむのは、いわゆるコロンIAL期アメリカにすでに芽ばえ、アメリカ人の生き方の支えにもなった価値観、作家ヘンリー・ジェームズ（1843～1916）の言葉を借りれば、実際主義、実利主義の評価である。つまり、アメリカを独立に邁進させた小冊子『コモンセンス』（1776）のトマス・ペインや独立宣言の草稿を書いたトマス・ジェファソンと同時代者だったフランクリンもまた、前のピューリタニズムの至福観に背を向け、独立独行と理知によって、現世的幸福が約束されると唱える、理神論的世界観の持ち主であった。彼のかかる考え方は、27歳の時にリチャード・ソンダーズというペンネームで出版し、その後25年もの間、北アメリカの植民地全域で聖書に次いで人気の高い出版物となった『貧しいリチャードの暦』（1732～1757）にすでに現われている。アメリカで最初の暦が刊行されたのは、1639年ケンブリッジの町においてであった。農事に必要な情報がのっていたので、当時のアメリカの農家には生活必需品となった。フランクリンの『暦』は農事に役立つ情報に加え、余白に「勤勉は幸運の母」、「空の袋は真っ直ぐに立たない」など実用的な金言がふんだんに平易な語で書きこまれていた。もっとも彼の記した格言の多くは自作でなく、ジョナサン・スウィストをはじめとする英米の作家から拝借したものだ。とはいえ、この『暦』は25年もの間ベストセラーとなり、彼は相当の財を築いた。47歳の1748年にフィラデルフィアで手広く営んでいた印刷屋を退き、科学的活動、社会活動、政治活動、文筆活動に専念し、余生を植民地時代のフィラデルフィアの文化的資質の発展に捧げることになる。

（天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長）

【天理大学アメリカス学会第 18 回年次大会報告】
「シンポジウム：創られた観光イメージ—古代文明と開発戦略—」要旨にかえて

初谷 謙次

天理大学アメリカス学会第 18 回年次大会（平成 25 年 11 月 23 日）において企画・実施されました表題のシンポジウムは、今年度出版予定の単行本に全記録が収録されます。ここではあえて、その要旨ではなくコーディネーターをつとめた筆者のシンポジウムの趣旨に関する発言を掲載させていただき、企画本の執筆者に統一テーマへの歩み寄りをお願いしたいと思います。

天理大学アメリカス学会は創立以来一貫して「複数形のアメリカ」を主張してまいりました。わが国ではアメリカというとアメリカ合衆国をさす場合が多いですが、中南米諸国に滞在しているとして、もし「アメリカに行きます」と言えば、きっと「あなたはすでにアメリカにいるではないか」と怪訝な顔をされるはずですが、ただし、当学会が複数形のアメリカにこだわる理由は、このような単なる地理上の呼称の問題だけではありません。

コロンブスのアメリカ大陸「発見」によって象徴的に開幕した近代という時代は、現在まで続く世界のグローバル化の長いプロセスであり、つねに著者性を独占してきたヨーロッパによる他地域 (the Rest) の「発見」と「発明」の軌跡でもありました。唯一の主体としての近代ヨーロッパは非ヨーロッパ地域を「発見」しただけではなく、好き勝手に命名し都合のよいイメージを付与（「発明」）してきました。自らを「文明」の側に置くヨーロッパ人はアメリカス世界を「野蛮」と位置付け、食人、人身御供、悪魔崇拝などのレッテルを張っていきます。むろん、オリエンタリズムを持ち出すまでもなく、アジア・アフリカも同様に他者化・客体化され非文明的なイメージを植え付けられてまいりました。アメリカス世界にはいくつもの境界線がひかれ、

「イスパノ」「イベロ」「ラテン」「アングロ」などの形容詞が付与され分断されてきたわけですが。天理大学アメリカス学会が「複数形のアメリカ」にこだわるのは、アメリカを分断する側ではなく、そこに暮らす人びとの視点からアメリカス世界が再構築されることを願うからであります。また、「アメリカス」と複数形にくくることによってひとつの「アメリカス」の実現という夢も語っているつもりであります。

これまで当学会は、「アメリカスという発想」「アメリカス学の現在」「アメリカス世界のなかの『帝国』」「アメリカス世界における移動とグローバル化」「アメリカス世界のなかのメキシコ」という統一テーマで年次大会を企画し、その成果として学術書を出版してきました。今回の、「観光イメージと古代文明」という統一テーマも当学会のこれまでの歩みの延長線上にあります。

グローバル化時代とはいえ、海外に出るとひとは外国人として扱われます。行きずりの会話では「観光ですか、お仕事ですか」と聞かれます。つまり、「今、あなたが移動中なのはわかりますが、その目的はなんですか」ということです。その前提として、旅行＝非日常的状态という図式が成立しており、その逆は日常＝定住です。今からおよそ 1 万年前に起こった「農耕革命」によって人は定住して生活することが可能となり、もはや野生の動・植物を求めて遊動する必要がなくなったのです。その結果、富と権力を独占するごく一握りの支配者階級を例外として、人びとは土地を離れることを許されず、旅＝移動とは無縁の生活を営んできました。お伊勢参りに代表されるような信仰を目的とした旅のみが許可され、聖地巡礼は観光の起源となりました。

ふたたび人びとが旅をするようになるのは 19 世紀中頃のことです。観光の大衆化には、交通網の整備、旅行斡旋業者の登場、宿泊設備

の充実等の旅のインフラ整備が不可欠のことでした。しかし、マスツーリズム成立のための決定的な要因は、コロンブスによる新大陸の「発見」によって始まった世界の可視化です。大西洋の向こうには化け物が住む奈落が待ち受けているかもしれないわけです。豊富な資金と航海技術によって異郷に飛び出したヨーロッパ人は世界中を丹念に探索し記録しつづけました。世界が閉じられた球体として認識されるようになるまでにさほどの時間は要しませんでした、人びとが安全かつ快適に旅することを保障するほどの情報蓄積にはおよそ4世紀もの歳月を必要としたのです。1872年に出版されたヴェルヌの『80日間世界一周』は世界旅行がリアリティをもつ時代になったことを象徴しています。つまり世界一周は、可能か不可能かではなく、何日間までできるかという時間の問題となったのです。

このようにマス・ツーリズムは一方では特権階級に独占されてきた旅を大衆化しました。しかしながら、他方で「世界の可視化」と「観光の大衆化」はヨーロッパによる世界支配システムの編成という政治経済分野の変動と深く結びついたものでした。近代観光において最初のブームとなった南太平洋観光は、同地の「南海の楽園」イメージの構築と結びついており、イメージ消費としての観光の本質を露呈しています。つまり、アメリカス世界においてヨーロッパ人はさまざまなものを見ましたが、それはたんなる地理上の「発見」のみではありませんでした。著者性を独占する唯一の主体として、新たに発見された地域の人びとや自然を客体化＝他者化する「まなざし」こそが最大の「発見」でした。観光客が観光対象にそそぐ「まなざし」もその延長線上にあります。今回のシンポジウムで、対象地域をペルー、メキシコなどアメリカス世界以外に、ハワイ、マレーシア、日本などにもフィールドを広げた意味はここにあります。ア

メリカス世界において発明された近代の「まなざし」を観光という脈絡において検討してみようということなのです。

また、近年「感情労働」ということが言われるようになってきています。本来、感情は労働の一部ではなく労働者個人のものであるはずなのに、その感情までが消費の対象とされている現象をさす言葉なのですが、例えば観光ということで考えると「ホスピタリティ」も本来は観光に携わる人の郷土愛や親切心など感情と深く結び付いているはずなのですが、それが「おもてなし」としてパッケージ化されるわけです。現代人が息苦しさを感じているとすれば、それは本来は市場の外部にあった個人の感情までもが市場内に放り込まれ商品化されることに起因しているのではないのでしょうか。

ウェーバーは、近代における「神聖性」の霧散と科学技術による物資的生産の拡大プロセスを「脱魔術化」と表現しました。先述のように観光は安全かつ快適に定住地を離れることができる条件が整備されてはじめて成立します。つまり、「世界の可視化」とは閉じられた球体としての世界から「未知の場所」を枯渇させてしまうことでもあるわけです。観光が定住地＝日常性を離れて観光地＝非日常を求める行為であるならば、そこになんらかの「神聖性」がなければなりません。つまり、近代に成立した観光という現象は世界の「脱魔術化」を前提としながら、神聖なるものを再び創りだそうとする「再魔術化」のアクターでもあるのです。

「脱魔術化」と「再魔術化」の悪循環、あるいは「神聖性」を求めて市場外にあったものを市場内に取り込んでいく限りないプロセス。このような無限ループを断ち切るような観光のありかたはないものかとも思うわけです。アメリカス学会と観光、またなぜ今なのかという一応の回答とさせていただきます。

(天理大学国際学部教授)

英米語専攻などの最優秀卒業論文に

「酒本真理子賞」を授与

天理大学アメリカス学会では、去る3月22日の卒業式当日に恒例の「酒本真理子賞」を外国語学科英米語専攻及び地域文化学科アメリカス研究コースで選出された最優秀論文執筆者に授与した。「酒本真理子賞」の授与式は、卒業式式典直後に開かれた英米語専攻とアメリカス研究コースの各教員・卒業生が参列したクラス会の席上挙行され、以下の受賞者2人にそれぞれ賞状と図書カード2万円分の副賞が手渡された。

この「酒本真理子賞」は、1990年3月に旧天理大学外国語学部英米学科を卒業し、1年後に志し半ばにして白血病で亡くなった酒本真理子さんの名前を冠して創設された賞である。彼女の父親の酒本昌彦氏から、「後輩の育成とアメリカス学会の出版活動に役立っていただきたい」と毎年寄付を頂戴しているが、その一部を「酒本真理子賞」として毎年卒業式当日に授与している。

英米語専攻：宮内 元浩

“Effectiveness and the Limitations of the Existing Audit Systems in Sweatshops: The Case of Wal-Mart Stores Inc, Nike Inc., and Apple Inc.” [英語論文]
 (「搾取工場における既存の監査システムの有効性と限界—ウォールマート社、アップル社、ナイキ社の事例を中心に—)

アメリカス研究コース：大藪 美佐子

「農業の視点から見るブラジル日本人移民—社会的地位の上昇への道のり—」 [日本語論文]

アメリカス学会の活動

◇定例研究会：7月19日(土)開催予定

天理大学アメリカス学会の2014年度定例研究会は、7月19日(土)午後2時から天理大学研究棟3階の第2会議室にて開催予定。研究発表予定者は、村山にな氏(玉川大学准教授)と鳥居玲奈氏(大阪大学専任講師)である。

◇第18回年次大会を昨年11月23日に開催

単行本第6弾発行を決定

恒例の第18回天理大学アメリカス学会年次大

会は、昨年11月23日に天理大学研究棟第1会議室で開催され、「創られた観光イメージ—古代文明と開発戦略—」のテーマの下でシンポジウムが展開された。關雄二氏(国立民族学博物館教授)が「南米ペルーにおける文化遺産観光とその問題点」と題して基調講演を行い、その講演に続いて、藤巻正己氏(立命館大学教授)、井上昭洋氏(天理大学准教授)、桑原久男氏(天理大学教授)、小林貴徳氏(同志社大学嘱託講師)の4名のパネリストも加わって白熱した議論が披露された(本ニュースレター6~7頁参照)。また、このシンポジウムの成果を中心に、今年度中にアメリカス学会の単行本第6弾となる『アメリカスのまなざし—再魔術化される観光—』が発行されることが、会長から報告された。本単行本への投稿締切は、本年8月末日。

編集後記

☆天理大学アメリカス学会の2014年会計年度は、昨年11月23日に開催の年次大会当日にスタートしました。2014年度の年会費(一般会員：5,000円、賛助会員：1口30,000円)を未納の会員の皆様は、昨年12月にお届けしました『アメリカス研究』第18号に同封しました郵便振込取扱票にて指定口座(下記参照)宛にお振り込みくださいますよう、よろしくお願い致します。郵便振込取扱票を紛失された方も下記の郵便振込口座番号宛てにお願いします。

口座番号：00900-5-70364

加入者名：天理大学アメリカス学会

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお寄せください。

天理大学アメリカス学会ニュースレター

(No. 70 : 2014年5月9日発行)

発行者：矢持善和

〒632-8510 天理市杣之内町1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax : 0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/